



- 程) (六月十六日)
- ・木村悠之介「水戸学の神道論における「固有」——儒教と身体性への視座をめぐる藤田東湖の位置」(七月十五日)
- ・藤井修平「宗教学理論史から見る認知科学的・進化生物学的宗教理論」(九月十六日)
- ・丹羽宣子「日蓮宗女性教師をめぐる現状と課題」(十月二十八日)
- ・古畑侑亮「明治初期における考古学的知識の受容と遺跡・遺物観——埼玉県域の国学者を中心に——」(十二月十五日)
- ・問芝志保「現代都市社会と家墓の継承——神戸市の旧共有墓地を事例に——」(一月二十日)
- ・大場あや「住民組織から見る葬制変容のメカニズム——契約講の連合と冠婚葬祭の「共同化」——」(三月十七日)

刊行物として『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第14号 (<https://www.kokugakuin.ac.jp/research/oard/jicc/jicc-publications/ar-jicc-14>) を刊行し、研究論文2本(吉永博彰「伊豆国三嶋社に於ける社領の研究——その形成と展開を中心に——」、小高絢子「観光化にともなう寺院側の自己規定——柴又帝釈天機関誌『柴又』における聖俗表象を中心に——」)と研究ノート6本(丹羽宣子「宗教と家族に関する研究動向」、高田彩「社寺参詣と聖地巡礼研究の研究動向」、藤井修平「宗教認知科学および宗教心理学の研究動向」、宮澤安紀「現代日本の葬送に関する海外の研究動向」、大場あや「葬制と社会変動に関する研究動向——二〇一〇年代以降の葬制変容論を中心に——」、原田雄斗「植民地期台湾における宗教研究と神道

論——増田福太郎の研究を事例に——)を掲載した。さらに、『Kokugakuin Japan Studies』no.3 (<https://www.kokugakuin.ac.jp/research/oard/jicc/jicc-publications/kjs-3-202202>) を刊行し、「日本文化を伝える」というテーマで3本の論文を英訳・公開した。

本事業は、これら両事業の成果を踏まえた上で、今年度より二カ年計画で行われる。内容として、本学の日本の宗教文化に関する学術情報を、研究を進めて更に蓄積し、公開を念頭に置いて整理・拡充していく。かつ、英語化・多言語化に可能な限り対応して、これを国内および国際的にも発信していく。これらを円滑に行うための体制作りを行い、今後の事業に接続させる。

具体的には、第一に「学術情報の研究・整理・拡充」について、①学術情報の一覧化・電子化、②学術情報の公開に向けた連絡・調整を進め、またこれらを受ける形で、③研究の推進と宗教文化教育の教材開発への展開を進めていく。

第二に「学術情報の国際発信」について、①デジタル・ミュージアムとの連携、②ウェブ上での学術情報の発信、③国内外の研究者・研究機関との交流・連携、④研究成果発信のための催事の開催などを行う。以下、それぞれの細目について、今年度の研究計画を記す。

ている資料群の電子化を進める。また、本学の持つ学術情報を公益に資する形で公開するための準備作業の一つとして、本学図書館に所蔵されている近代の神道・国学関連雑誌の調査を進め、優先度の高い重要な資料について電子化を行うことを検討する。

**学術情報の研究・整理・拡充**

**「学術情報の国際発信」**

**①学術情報の一覧化・電子化**

旧日本文化研究所と21世紀COEプログラムにおいて蓄積されてきた日本の宗教文化に関する学術情報について、あらためて目録化と整序作業を進め、記録として保管されてき

① デジタル・ミュージアムとの連携  
本学諸機関と連携してデジタル・ミュージアム (<https://dmuseum.kokugakuin.ac.jp/>) の運営を推進する。また Encyclopedia of Shinto (<https://d-museum.kokugakuin.ac.jp/eos/>) など既にデジタル・ミュージアム上で公開している学術情報を拡充していく。

② 学術情報の公開に向けた連絡調整  
旧日本文化研究所と21世紀COEプログラム、また研究開発推進機構において蓄積されてきた学術情報について、オンラインで広く公開することを念頭に置いて、これを行うために必要な手続きを検討の上、連絡調整作業を行う。公開については本学図書館OPAC ([Kaiser https://kaiser.kokugakuin.ac.jp/](https://kaiser.kokugakuin.ac.jp/)) からアクセス可能な機関リポジトリ(K-RAIN)への登録を並行して進める。

③ 国内外の研究者・研究機関との交流・連携  
日本の宗教文化研究に関わる研究者・機関について情報を集積し、交流・連携を図る。英語圏の研究者と協力して、研究成果を英語化して発表する。

(文責・星野靖二)

## 学術資料センター 令和四年度事業計画① 学術資料センター(考古学資料館部門) 事業

### 事業の目的

本学の共同利用研究機関である学術資料センターは、昭和三(一九二八)年に設けられた「考古学標本室(後の考古学資料館)」と、昭和三十八年に開設された「神道学資料室(後の神道資料館)」を前身とし、國學院大學博物館における大学ミュージアム活動の中核を担っている。当部門は、世界の中における日本文化の位置付けや、その起源・展開を追究するために、考古・民俗・歴史資料の収集と、主に祭祀遺跡を対象とした調査・研究を進めている。

本「学術資料センター(考古学資料館部門)事業」は、旧考古学資料館より継続している考古・民俗学資料研究、旧日本文化研究所「学術フロンティア構想」以来の資料デジタル化研究、旧伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクトを引き継ぐ祭祀考古学研究、同一國學院の学術資産に見るモノと心」の一部を継承した歴史資料研究を網羅する大規模なものである。また、日本文化の形成と特質を明らかにするための研究を実施するとともに、その成果を現代社会の諸課題に活かすことを目的としている。

### 事業の概要

#### ① 整理保管

列品台帳の増補と、主要収藏品目録の作成を進め、列品保存・管理システムの充実を図り、中長期的な資料収集・修理計画を策定・推進する。

#### ② 調査研究

学史的な重要資料や、纏まった資料群の調査研究を推進し、その学術情報を逐次公開するとともに、将来的な『重要資料学術調査報告書』の刊行に備える。加えて、本学における考古学・民俗学・歴史学研究の歩みを継承し、特定テーマを設けた調査研究事業を実施する。加えて、祭祀遺跡DBの構築(当方は文部科学省科学研究費助成事業新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学―文明創出メカニズムの解明―」との連携で推進)と、館史編纂に取り組む。

#### ③ 教育普及

デジタル画像を伴う特定資料目録を作成し、WEB上で公開。『漢代物質文化資料図説(邦訳)』など、館蔵文化財に関する書籍を刊行。研究成果全般について、國學院大學博物館における展示活動で公開する。

#### ④ 学芸職員実践教育

学部・大学院と連携し、館務を担

う臨時雇員に学生等を任用。具体的業務を実践することで専攻生を育成し、専門職へのキャリアデザインを提供する。また、山梨県埋蔵文化財センター等の協力を得た実地教育も推進する。

#### 整理保管

計画的な館蔵資料の収集と、昭和三年から作成してきた『列品台帳』をもとに、『収藏品総目録』を整備する。具体的には、不断に根本となる『列品台帳』の点検を繰り返すとともに、昨年度デジタルミュージアムにて公開した「縄文土器」「和鏡・柄鏡」や、順次データ追加中の「社寺等絵葉書資料」をはじめとする主要収藏品目録に加え、研究者個人資料(柴田常恵資料・神林淳雄資料・柳田康雄資料・吉田恵二資料・齋藤ミチ子資料など)のデータベース化を進める。具体的には、「土偶」「石棒」「弥生青銅器」「祭祀遺物」「埴輪」「古鏡」「古瓦」「骨蔵器」「経典・経筒・外容器」「板碑」「鞍山中旧蔵資料」「民具」と、「神林淳雄資料」「柳田康雄資料」「齋藤ミチ子資料(部分)」「社寺等絵葉書資料」について、デジタル化・メタデータ作成を進め、令和七(二〇二五)年度までに目録を順次公開し、同八年度に『収藏品総目録』の完成を期したい。また、この過程で、台帳・目録に沿って収蔵資料の適切な収納・保管環境の整備を図っていく。

#### 調査研究

これらと並行して、完結した「紀年銘和鏡の集成研究」に続き、「神社境内祭祀遺跡の研究」「古墳出土資料の研究」「伊豆地域の宗教考古学的研究」「蒙古襲来の考古学的研究」「柴田常恵資料の研究」「琉球・沖縄と國學院の関りに関する研究」などを推進する。とりわけ、「神社境内祭祀遺跡の研究」「伊豆地域の宗教考古学的研究」「琉球・沖縄と國學院の関りに関する研究」については、神道資料館部門や他機関とも連携し、通史的な神社史研究・日本思想史研究に参画する。

#### 教育普及

成果の公開としては、デジタルミュージアムによるWEB公開・刊行物発行・博物館展示を実施する。「社寺等絵葉書資料」は、令和五年度を以て全データ公開を完了する。また、「柳田康雄写真資料」は、新型コロナの影響で整理作業に遅れが出ているが、令和四年度を目途に公開する。また、『漢代物質文化資料図説(邦訳)』(令和五年度)など、順次館蔵文化財に関する書籍を刊行する。研究成果全般については、國學院大學博物館における展示活動で公開する。令和四年度は、「うちなーぬがわりやー琉球・沖縄学と國學院」展、および「走湯山と伊豆修験(仮)」展を計画している。

(文責・深澤太郎)

## 学術資料センター 令和四年度事業計画② 学術資料センター(神道資料館部門) 事業

### 事業目的

令和四年度より、研究事業名を「学術資料センター(神道資料館部門)」事業とした。同研究事業は、本部門が所管する資料の整理・保存・研究を継続し、研究・教育などに活用できる体制を整えることを目的とする。ここで得られた成果は、本部門の刊行物、國學院大學博物館での展示のほか、國學院大學博物館Online Museum、デジタルミュージアムを通して学内外と共有する。

また、令和二年度より学術資料センター(神道資料館部門)で進めてきた「神道関連資料の整理分析と神道史の再検討」は、本事業内において継続する。

事業名称を変更したのは、研究の基礎となる所管資料の整理・調査など、長期的な事業を進めるためであり、これまで行ってきたような目的を定めた研究事業は、本事業の中で進める。

本部門は、本研究事業において研究開発推進機構内の神道史(とりわけ古代・中世)や祭祀に関する本学学術資産調査・研究、展示を促進する役割を担うことを目指す。

### 前年度の成果

#### ① 刊行物

令和三年度は、『資料で見る神道

史 國學院大學博物館 神道展示室ガイドブック』を刊行した。同書は平成二十六年に刊行した『資料で見る神社と神道の歴史』(笹生衛(監修)、加瀬直弥(編))を増補・改訂したものである。

國學院大學博物館 神道展示室の構成にあわせ、「古代祭祀の成立」大嘗祭「神宮祭祀」「律令祭祀」「公祭」「二十二社・一宮」「御旅所祭祀の成立」「祓」「神社信仰」「神仏習合」と両部神道の展開「吉田神道の成立」「江戸時代の神職統制」「大神宮信仰と庶民の神社参詣」「神社有職故実」「祭祀の広がり」と四季のまつり」より構成した。

各項目には、その解説と関連する本学の学術資産の写真・説明(國學院大學図書館所蔵資料や、通常、展示していない資料も含む)を掲載した。巻末には資料編を付し、関連する史資料の本文を掲載した。

本書は國學院大學博物館 神道展示室を用いた授業などで配布するほか、國學院大學博物館ミュージアムショップで販売している(定価四〇〇円)。

#### ② 展示

次の國學院大學博物館での展示に携わった。

・特別列品「神の新たな物語―熊野

と八幡の縁起―」(会期：令和三年五月十三日～七月三日)

・企画展「ホワッツ神道―神道入門―」(会期：令和三年七月七日～九月十一日)

・特別展「都の神やしりとまつり―世界遺産 賀茂別雷神神社の至宝―」(会期：令和四年一月二十七日～三月二十六日)

「ホワッツ神道」は日本文化研究所、JSPS科研費「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」(代表：平藤喜久子)、國學院大學神道文化学部、カリフォルニア大学サンタバーバラ校 Fabio Rambelli 研究室と共に、主に展示案の策定や、冊子の編集協力などを行った。

「都の神やしりとまつり」は賀茂別雷神社・國學院大學博物館を主催として行ったもので、本部門の研究成果も反映させた。詳細は「〇頁」特別展「都の神やしりとまつり―世界遺産 賀茂別雷神神社の至宝―」をご覧ください。

#### ③ その他

デジタルミュージアムでは、國學院大學21世紀COEプログラムで作成した「神社史料集成」を、現行のシステムへ移行する作業を進めている。また、『延喜式』祭祀関連条文概要の集成については、確認作業を続けている。

資料の整理・調査では、宮地直一博士旧蔵の洋装本の仮目録を完成させ、令和三年十一月に寄贈された西田長男博士旧蔵資料の受贈のための

点検を完了した。なお、西田博士旧蔵資料については、一六頁に詳述した。

### 令和四年度の事業計画

令和四年度は、これまで本部門が行ってきた学術資産の調査・研究を継続するとともに、これまでの調査データや画像などのとりまとめや確認を進める。

この一環として、宮地直一博士旧蔵資料のうち、天神人形ほかの整理を継続するとともに、西田長男博士旧蔵資料については、目録の作成、調査・研究を継続する。

また、これらで得られたデータによりよい発信の方法について、ジャパンサーチを始め、学内外のデータベースなどの連携を含めて検討する。

刊行物では、これまで本部門が刊行してきた『祭祀・祭礼の変遷―古代・中世を中心に―』(平成二十九年)、『資料で見る大嘗祭』(平成三十年)、『祓の信仰と系譜』(令和元年)、『四季の祭りと神道の歴史』(令和二年)などを一冊にまとめる。

國學院大學博物館の展示では、宮地直一旧蔵資料のうち、熊野信仰史に関連するノート・原稿類を、神道展示室において展示することを計画している。

(文責・大東敬明)

## 校史・学術資産研究センター 令和四年度事業計画 校史・学術資産研究センター事業

### 事業目的

校史・学術資産研究センターは、國學院大學の歴史及および本学の学術資産に関する研究を行い、その成果を博物館の展示や本センターの機関誌等での発表を通じて公開・発信することにより、広く社会に還元することを目的に、主に校史研究部門と学術資産研究部門から構成される。

校史研究部門では、校史資料の整理・調査・研究を通じて、大学アーカイヴの基盤を整備し、自校史の編纂・再検討を行うとともに、自校史教育用テキストを作成・集積して学部教育で活用する。

学術資産部門では、本学所蔵の貴重資料をはじめとする学術資産の調査・研究を通じて、学術資産の活用を具現化するための体制の整備を行うとともに、その学術的価値を学内外に周知する。

前年度まで、両部門は独立した事業を立てていたが、本年度からは両部門の事業を統合し「校史・学術資産研究センター事業」とした。これは、本センターが所蔵する校史資料を中心とする学術資産の学内用データベースの整備や、博物館における校史・学術資産関連資料の展示作業が、両部門を連関させて推進するためである。

### 前年度の事業成果

校史研究部門では、これまでの「校史資料簡易目録」を基盤データとして、新たに目録「校史資料目録」を作成した。引き続き、旧校史資料課からの移転・改組の過程で別々に保管されるに至った資料群をも統合した「校史資料総目録」の作成に向けた作業に取り組んでいる。前年度は、校史資料の保存のため、新たに書棚の配架を行い、資料を収集・保存する環境および調査・研究環境を大幅に改善した。また例年通り、資料寄贈や校史に関連する問い合わせへの対応も行った。さらに令和四年の本学創立一四〇周年を見据え、「神道と文化」科目のサブテキスト『國學院大學の歴史』の改訂を行った。

学術資産研究部門では、これまでも本学の学術資産を調査して得られた知見を展示やデジタルライブラリーの解題を通して学内外に発信してきた。前年度では「学術資産の活用」を具現化することを目的として、本学所蔵の学術資産の活用を推進する体制を整え、学術資産の全体像の把握に資するデータベースを構築するために「貴重書および特殊コレクション」に力をおよび「目録類の再点検」に力を注いだ。とくに「貴重書および特殊コ

レクションに収められた資料の再調査」に関わって、本学博物館にて特別展「『日本書紀』撰録一三〇〇年」や特別展「都の神やしろとまつり」を開催し、本学の学術資産も活用・公開し、展示図録を作成・発行して、本学の学術資産の調査・研究とその成果の社会への還元を行った。また「目録類の再点検」については、その基礎作業となるデジタルライブラリーの全体像の把握の一環として、本学図書館所蔵の貴重書を中心に「畠山家文書」「吉田家文書」「吉田

神道関係近世文書『延喜式』卷八(兼永筆)および『日本記当流巻』などの一群の撮影を行うとともに、解題の作成を通じてデータの整理に取り組んだ。加えて右記特別展との関連で、貴重書である『日本書紀神代巻抄』と『字音仮名遣』(本居宣長自筆草稿本)の撮影と解題の執筆を行った。本学図書館との協働により、これらの典籍・古文書などの書誌および解題を画像データとともにデジタルライブラリーに掲載した。

なお、センターの事業を通じて得られた知見は、機関誌『國學院大學校史・学術資産研究』『校史』などで公開と発信を行った。これらの昨年度の成果に基づき、本年度も引き続き調査・研究に取り組む予定である。

### 本年度の事業計画

校史・学術資産研究センター全体による取り組みとして、令和四年度は創立一四〇周年記念事業にあたる『國學院大學一四〇周年記念誌

(仮)』の編纂を最優先の業務とし、校史資料を中心とする学術資産の学内用データベースの整備や博物館における校史・学術資産に関連した資料の展示作業を行う。

令和二年度以来の研究開発推進機構の体制の見直しと将来的な改編なども念頭におきつつ、本センターの組織規模に見合った事業を運営していくため、従来の事業や業務内容を整理し、今後は日常業務を中心として単年度ごとに計画を立て進めていく。

事業としては一本化したのが、具体的な部門別の日常業務および計画として、校史部門では学内外からの校史・学術資産に関する問い合わせへの対応や創立一四〇周年を迎えるにあたっての自校史教育用テキストの改訂、また学内における自校史関連の研修などに従事する。学術資産研究部門においては図書館所蔵の貴重資料をはじめとする学術資産の調査・研究に取り組む、その成果を本学図書館ホームページ上のデジタルライブラリーにおいて解題として公開する。

なお、本センターの事業を通じて得た新たな知見や研究成果は、博物館での展示や機関誌である『國學院大學校史・学術資産研究』や『校史』をはじめとする各種学術雑誌上の発表を通じて公開・発信をしていく。

(文責・渡邊 卓)

研究開発推進センター 令和四年度事業計画①  
研究開発推進センター研究事業  
「神道・日本文化の先端的研究」

事業の概要・目的

本事業は、学校法人國學院大學中期五カ年計画に従い、「日本」を知る教育研究の推進と発信」を実現すべく、これまで培ってきた研究蓄積を基盤に「神道・日本文化の先端的研究」を推進することを目的とする。これにより、新たな国学的研究による拠点機能の拡充を目指していく。

本年度は、下記の計画に示す通り、学外の研究機関・組織、機構各機関との連携を図りながら、本事業の基盤整備を主として行なう予定である。なお、本事業は、院友神職会をはじめとする神社界からの指定寄附金等、外部資金に基づく単年度事業として実施される。

前年度の成果

前年度の研究事業においては、  
「(一) 幕末維新期の神道・国学に関する研究」、「(二) 神道・日本文化に関する学内資料の調査・研究」、「(三) 伝統文化・神社・地域と共存社会の研究」、「(四) 乃木神社の研究」、「(五) 神道・日本文化研究の国際比較と国内外の研究者間の連携強化」、「(六) 研究開発推進センター研究会」、「(七) 『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』の刊行」を行なった。

(一) では、近代神道史研究の基礎資料となる明治前・中期の神社並びに宗教関係法令のデータベース作成、関連資料等の調査を実施した。また、(二) においては、本学図書館が所蔵する近代神社昇格関係資料について、将来的活用の方途を検討すべく、資料の整理及びリスト作成を行なった。

(三) では、令和二年(二〇二〇)度共存学公開研究会「東日本大震災被災地の復興活動十年を振り返る」の内容を編集し、『研究開発推進センター研究紀要』第十六号(令和四年三月)に研究会記録を掲載した。また、令和三年度前期に実施したオムニバス授業「共存・共生の思想(シンポジウム)」では、「共存学」の研究成果を教育に還元している。乃木神社からの依頼に基づく(四)では、令和五年の乃木神社創建百年を記念して刊行する『乃木神社御鎮座之記(仮)』に関わる調査・研究を進め、乃木神社との打合せ、執筆・編集作業を実施した。

(五) では、学外研究機関との継続的な連携強化を図るべく、神社本庁総合研究所との研究協力に関する覚書を締結し、今後の研究協力に関する打合せを行なった。また、明治聖徳記念学会シンポジウム等の共催

事業や、(六) センター研究会に於いては当初の予定通りには実施できなかったが、古沢広祐研究開発推進機構客員教授による公開講演会「共存・共生の思想とSDGs」のオンデマンド動画を作成し、本学HP上に公開した。そして、上記研究事業に係る成果刊行物として、(七) 『研究開発推進センター研究紀要』第十六号(令和四年三月)を編集・刊行した。

本年度の計画

こうした前年度までの成果を踏まえ、本年度は以下の事業を推進する。なお、本事業は単年度事業であるが、中期五カ年計画に従い、五年間で一定の成果を収めることを構想しており、初年度にあたる本年度は、研究事業の基盤整備に主眼を置く。

- ① 本事業を推進するための学際的・国際的研究拠点の構築
  - ② 神道・日本文化にかかる近年の研究の概括と課題抽出
  - ③ 神道・日本文化に関する基礎資料の作成
  - ④ 神道・日本文化関係資料の調査・保存・活用
  - ⑤ 研究開発推進センター研究会の企画・運営
  - ⑥ 研究成果の社会発信
- このうち②は、学術資料センターなど機構各機関と調整しながら、近年の神道・日本文化に関する研究業績の概括、課題抽出、機構内の各教員(専任・兼任)が専門とする研究分野の横断的な関連付けの方途を模

索する想定である。

③は、主として本社本庁総合研究所と連携・協力しながら実施する。具体的には、前年度作成した神社・宗教関係法令データベースを基に、「明治期神社関係法令史料集成(仮)」の作成を行なう。また、本センターも作成に協力した『皇國時報』総目次』について、冊子刊行に向けた編集作業を進める。

この②と③の推進を通じて、本事業全体の方向性を確定させるとともに、①の学際的・国際的研究拠点の構築につなげていく。

④は、昨年度整理した近代神社昇格関係資料について、未整理分も含めて調査し、資料の性格や活用方法などについて検討する。また、必要に応じて未整理分資料の整理・リスト化を行なう。

⑤は、若手を含めた多彩な研究者を招聘した研究会を開催すべく、企画・調整を行なう。これにより、①の研究拠点の構築に向けて学術交流の活性化を図る。

⑥は、成果刊行物として、『研究開発推進センター研究紀要』第十七号を編集・刊行するとともに、本センターで蓄積してきた研究成果を広く社会に公開・発信すべく、過去のセンター紀要や『ブックレット渋谷学』のリポジトリ公開に向けた準備作業を進める。

(文責：宮本誉士、半田竜介)

## 研究開発推進センター 令和四年度事業計画② 「SDGs」と建学の精神」研究事業

### 事業の概要・目的

本事業は、学校法人國學院大學中期五カ年計画に従い、「共生社会を支える人材の育成」に寄与すべく、本センターにおいて推進してきた「渋谷学」「共存学」等の研究成果を再構成して実施するものである。

事業の目的は、タイトルに示す通り、近年世界的に取り組まれてきている国連「SDGs(持続可能な開発目標)」を本学の「建学の精神」から考察する研究を中核として推進することにある。さらに、その研究成果や取り組み等を「SDGs」と関連させながら、本学の教育活動や社会貢献・地域連携へと展開させる方途を模索していく。

本年度は、五カ年計画に基づき、五年間の研究事業として構想する初年度であり、今後の研究事業を着実に進展させるべく、調査・検討を行い、本事業を今後推進するための基盤整備を実施する計画である。そのために、これまで本センターにおいて実施してきた「渋谷学」等の成果の再検討、本学における取組みの現状調査、学内関連事務部局との連携等を行いながら、公開講演会の開催、成果公開の方途等を検討していく。周知の通り、国連総会において、全ての加盟国の賛同を得て二〇一五年に採択された「SDGs」は、

二〇三〇年に向けて設定された人類共通の目標であるが、「SDGs」で提起された諸課題を解決していくためには、人材育成や知の創出が不可欠であり、多様で異なる文化の理解、「持続可能性」を脅かしている諸問題の領域横断的な学びの機会が必要であると指摘される(『SDGs時代の教育―全ての人に質の高い学びの機会を―』学文社、二〇一九年等参照)。

過去に本センターで実施した國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」では、持続可能な「共存社会」の構築を目指し、グローバル化する社会・世界の諸課題について、領域横断的な研究を実施しており、その成果刊行物やシンポジウム記録等の内容は、本事業の基盤となる研究成果を含むものといえる(平成二十四年度～二十九年度)。

なお、同事業は、「渋谷学」と「日本発 共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」の両プロジェクト(平成二十二年度・二十三年度)を統合したものであり、「渋谷」「地域」「日本」「グローバル化する世界」の四領域を設定し、全学的に推進すべき学部横断型の学際的研究事業として実施された(本紙一二頁参照)。本事業は、これらの成果を再構成し

て実施するものであり、「SDGs」を軸に、多様性や共生社会を見据えた社会貢献・地域連携を想定するものである。

また、研究目的から見れば、「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」は、様々な社会や局面において観察される「共存」に関わる現象の事例研究をもとに、領域横断的な検討を進めることで、持続可能な「共存社会」モデルを構築し、それによる社会貢献を目的として進められたものである。これに対し、本事業は、「SDGs」で提起された諸課題を検討しながら、本学が蓄積してきた学術研究の成果を集約・再評価し、教育や社会貢献・地域連携へと有機的に接続させていくところに特徴がある。

### 本年度の計画

以上述べた通り、本事業は、これまで本センターにおいて推進してきた研究事業の成果を再検討した上で、「SDGs」を本学の「建学の精神」から考察する研究を軸に、「多様性」や「共生社会」などに関わる研究成果をも幅広く調査・検討し、國學院大學中期五カ年計画の「共生社会を支える人材の育成」に研究面から寄与することを目的とする。

本事業計画においては、こうした観点から、次のような調査・研究及び成果公開を実施する予定である。

まず、資料調査として、「SDGs」関連の書籍・論文・記事等の収集・整理を行ない、「SDGs」関連文献目録(稿)を作成する。あわせて、「多様性」「共生社会」「持続可能性」

「まちづくり」など、本事業に関連する資料の収集・整理・検討を行なっていく。また、従来の「渋谷学」「共存学」の成果をはじめ、本学の研究蓄積を再検討しながら、それらを活かした公開講演会、公開講座などの企画・立案を行なう。

また、本学における取組みの現状調査、学内関連事務部局との連携、学内における取組みを集約するためのプラットフォーム構築を目指した基盤整備、学外協定等を活用した研究成果の活用方法など、建学の精神に即した研究による社会貢献・地域連携の方途を模索していく。

また、「渋谷学」「共存学」の研究成果を学部教育に還元すべく実施してきたオムニバス授業、「國學院の学び(渋谷学)」(後期開講)、「共存・共生の思想(シチズンシップ科目)」(前期開講)においても、「SDGs」に関わる講義を展開することで、本事業の成果を還元していく。なお、既に本年度前期授業として開講している「共存・共生の思想」(オンデマンド型授業)においては、各回の講義内容に関連する「SDGs」のゴール及びターゲットをそれぞれシラバスに記載し、各回の講義を「SDGs」に関連させる形で授業展開することを試みており、三百人を超える学部生が受講している。

また、本事業の成果については、本年度刊行予定の『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第十七号において、その一部を公開する予定である。

## 研究開発推進センター 令和四年度事業計画③ 「國學院大學」「古典文化学」の創出研究事業

### 事業概要

本事業は、國學院大學が平成二十八年度文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」(タイプB・世界展開型)として選定された「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―で実施してきた研究事業を継承するもので、令和三年度研究事業「神道と日本文化の創造的「古典学」―令和の新しき国学研究―基盤整備事業」の後継事業にあたる。國學院大學中期五カ年計画のもと、日本と日本文化に関する教育・研究環境の整備のため、本事業を研究開発推進機構の諸機関を横断する研究事業として、その推進をマネジメントするものである。

### 事業目的

本事業では、「国学」に由来する本学の特徴ある教育・研究をより一層、発展させることを目的とする。そのため、「古典」のうち特に「古事記」「万葉集」を対象に、歴史学・文学・民俗学・考古学などの総合的かつ学際的・国際的な研究アーリーナを構築し、「古典文化学」の基盤として「国学」の現代的な意義の再検討を行い、その成果を教育にも還元し、包括的かつ戦略的に世界へ発信する。これにより「古典」研究の拠

点として本学のブランド力をさらに強固なものとしたい。

### 事業内容

本事業では上記目的を達成するため、五年間にわたり以下の事業を推進していく。

- ① 国際シンポジウム・ワークショップ等の開催
- ② 「古事記」「万葉集」の文献学的研究
- ③ 「国学」的「古典」研究の再検討
- ④ 研究成果の教育還元
- ⑤ 「古典学総合データベース」の構築
- ⑥ 研究成果の社会発信

①は「国学」を含んだ「古典」を対象とするグローバルな学術研究ネットワークの拠点(共同研究の場)を形成するため、国内外の「古典」や「日本文化」研究者及び学会や学外の研究機関等と連携し、国際シンポジウム等を開催して学術交流を活性化させる。

②は「古典文化学」の中核となる研究事業であり、「古事記学」「古典学」における研究蓄積を継承し、「古事記」「万葉集」を対象として緻密な文献学的研究を基軸とする総合的な観点から研究を進める。

③は本学の学術蓄積の由来となっている「国学」による「古典」研究

を、近世から現在に至るまでの研究史を踏まえ再検討を行う。

④は「古典文化学」に関わる共通教育科目や大学院と連携し、研究成果を教育へ還元するとともに研究プロジェクトの推進を通じて若手研究者の育成を図る。

⑤は新たに「古典学総合データベース」を構築し、Web発信などを通じて研究成果の教育への還元や社会的波及を行う。

⑥は博物館展示、書籍の出版による研究成果の社会発信を展開する。以上、六つの事業内容により、本学の「古典」研究をより一層発展させていく。

### 本年度の事業計画

事業の初年度にあたる本年度については、グローバルな学術研究ネットワークの拠点として本学を位置づけるための基盤を構築すべく以下の事業を推進する。

① 国内外の「古典」や「国学」、「日本文化」の研究者を招聘し、学術交流を図るとともに、国際シンポジウムやワークショップ等を開催して「古典」の学際的・国際的研究拠点としての役割を実質化する。

② 「古事記」「万葉集」を対象に、文献学を基軸とする総合的研究を行う。「古事記学」「古典学」以来の事業である「古事記」の本文校訂・訓読・注釈及び英訳、また神名・氏族・地名データベースの補填・更新を進めていく。年六回ほど定例研究会を開催し、研究蓄積の拡充及び学術交流を図る。

③ 「国学」の歴史的展開を踏まえつつ、近世以来の「古典」研究を再検討し、「古典」と「国学」の研究を架橋することで「国学」の現代的意義を考える研究を展開する。また、「古典学」事業を継承して賀茂真淵『万葉新採百首解』の翻刻作業を継続するとともに、学内所蔵の国学関連資料である井上家文書を整理し、近世・近代国学者の人的・知的ネットワークの再検証を行うための体制を整備する。

④ 「古典文化学」の研究成果を、共通教育科目等を通じて学部教育に還元するとともに、大学院と連携してプロジェクトを推進することで若手研究者の育成を図る。

⑤ 「古典文化学」の研究成果を、MISを中心に発信するため、「古事記学」事業において作成した「古事記総合データベース」を拡充し、「古典学総合データベース」を構築するための基盤整備を行う。

⑥ 研究成果を一般社会へ広く還元する方法として、博物館展示や関連書籍の出版等について検討する。また、「古事記学」事業から継続して行っている「古事記」注釈と同注釈の英訳は、「研究開発推進機構紀要」にて引き続き公開する予定である。

以上の計画を実施し、学術研究ネットワークの拠点構築を進めることとで五年間に及ぶ研究事業の基盤を築いていく予定である。

(文責・渡邊 卓)



## 國學院大學博物館

### 令和四年度事業計画

#### 事業の目的

國學院大學博物館は、建学の精神に基づいた日本文化に関する学術資料を広く調査研究、収集、分類、保管、展示するとともに、学術研究成果の公開・発信を行い、もって研究教育の支援及び社会貢献に資することを目的とし、(Ⅰ) 展示公開、(Ⅱ) 教育普及、(Ⅲ) 環境整備・営繕、(Ⅳ) 運営支援の四つを軸に事業を推進する。

本年度は、前年度までに実施してきた博物館の基盤強化のための施策(展示の再構成、多言語化、ミュージアムショップの運営、環境整備)を継続するとともに、博物館での展示にオンラインミュージアム、デジタルミュージアムを連携させた総合的な運用を目指す。これにより、より多角的な研究成果・学術資産の発信を行う。

#### 本年度事業の概要

##### (Ⅰ) 展示公開

本学の学術資産を活用し、研究成果を本学学生・社会に対して公開するため、次の展示を行う。

##### (1) 常設展示

a. 三つの展示室(考古、神道、校史)において、主に研究開発推進機構の各機関と協働しつつ実

施する。

b. 定期的に、展示替えを行う。

c. 展示構成、解説等について、継続的に改善、変更、拡充を図る。

##### (2) 特別展・企画展

本学の学術資産、研究成果、学術的・組織的ネットワークを活かしたテーマ性を有する展示を計画・実施する。

##### (3) 特集展示等

特別展・企画展と同様の目的と役割を担う小規模な展示を、各展示室や博物館ホールで実施する。

##### (Ⅱ) 教育普及

研究開発推進機構を含め、本学の研究成果を本学学生のみならず、広く社会に対しても公開し、もって社会貢献・地域連携の強化を行うため、各展示に関連したイベント(オンライン含む)を実施する。

##### (Ⅲ) 環境整備・営繕

資料の活用と保存を両立させるため、展示・保管空間の環境を適切に保ち、借用資料を含めた展示・保管資料の保護を行う。また、新型コロナウイルス感染症対策として、施設内の衛生環境を整備・維持する。

##### (Ⅳ) 運営支援

博物館の情報をホームページやSNS等で随時公開する。更に、ミュージアムショップでも、展示図録や本

学の研究成果に関係する書籍、グッズなどを販売することにより、展示への興味を深めてもらい、利用者の満足度やリピーター率の向上を図る。以上の施策による情報発信、評価や口コミにより、知名度の増進などを狙う。

#### 実施計画

##### (Ⅰ) 展示公開

##### (1) 常設展示

a. 展示替えを行う。

b. 展示解説の部分的な変更を行う。

c. デジタルミュージアムとの連携を強化する。

##### (2) 特別展・企画展

本年度の特別展・企画展は次の通り(※は国指定品借用を伴う)。

a. 春の特別列品「鎌倉幕府と執権政治―國學院大學図書館の名品―」

b. 企画展「沖縄復帰五〇年うちなーぬ ゆがわりや 琉球・沖縄学と國學院」

c. 國學院大學創立一四〇周年記念展「近代工芸の精華―有栖川宮家・高松宮家の名品&金子皓彦寄木細工コレクション―」

d. 特別展「走湯山と伊豆修験―知られざる山伏たちの足跡―」※

##### (3) 特集展示等

e. 企画展「物語絵」

特集展示・季節の展示等を各展示室で実施する。

##### (Ⅱ) 教育普及

特別展・企画展毎に、展示解説やミュージアムトーク等の動画コンテ

ントを制作。オンラインミュージアムとして配信し、博物館利用層の拡大を目指す。

##### (Ⅲ) 環境整備・営繕

展示室や収蔵庫などにおける空気質・温湿度維持のための測定評価と、虫菌害を排除するための総合的有害生物管理(IPM)を行う。また、日本博物館協会等の関連ガイドラインに基づき、感染症拡大防止対策を継続し、利用者の安全確保と館内設備の消毒も日常的に実施する。

##### (Ⅳ) 運営支援

ホームページ・SNSによる情報発信を推進し、また、来館者情報の分析を通して運営の改善を行う。更に各方面への広報活動、ミュージアムショップでの図録や本学・博物館関連商品の販売(店頭・配送)などに加え、英語による展示解説の充実と発信を行う。

令和三年度は、特別展を二回、企画展を三回開催し、短縮開館の運営下ながらも年間の総来館者数が一万五九九五人を記録した。

本年度は、短縮開館の態勢を当面継続しながら感染症対策を徹底し、社会状況に応じて柔軟に対処する。

依然としてコロナ終息の目途が立たず大きな影響を受けるなか、博物館での展示に加えて、オンライン等を活用し、多様な形での社会貢献を目指していく。

(文責・國學院大學博物館)

國學院大學博物館

特別展「都の神やしるとまつり」

—世界遺産 賀茂別雷神社の至宝—

概要

京都の北方、賀茂川上流に鎮座する賀茂別雷神社(通称、上賀茂神社)は、賀茂別雷大神をご祭神としている。八世紀末に大和国から山城国に都が遷って以降、同社は「都の神」となり、朝廷をはじめ、多くの人々の信仰を集めてきた。同社の本殿と権殿は国宝に、それらを含む敷地はユネスコ世界文化遺産に指定されている。また、古代から続く神社の歴史を語る「賀茂神主経久記」(『嘉元三年御遷宮日記』『賀茂社嘉元年中行事』ほか)や賀茂別雷神社文書(約一万四〇〇〇点)は重要文化財に指定されている。本展では、これら賀茂別雷神社所蔵資料に加え、國學院大學図書館(座田家文書ほか)、同博物館、東京大学史料編纂所所蔵資料を展示した。

果の一部でもある。

展示構成

展示の詳細は、展示図録(『都の神やしるとまつり 賀茂別雷神社の至宝』)國學院大學博物館、令和四年一月)に記載している。あわせてご覧いただきたい。

【第一章】創建の由緒

賀茂別雷神社の祭神・賀茂別雷神の神話や、都が平城京から山城国長岡京・平安京に遷ったことにより、同社が「都の神」となったことを示した。展示資料は『本朝月令』(『群書類従』八一)、『続日本紀』卷三八(ともに國學院大學図書館所蔵)である。

【第二章】賀茂別雷神社の歴史

賀茂別雷神社文書ほかを展示し、同社の歴史を示した。主な展示資料は賀茂別雷神社文書「源頼朝下文写」(寿永三年)・「氏人置文」(永正十七年)ほか一点、東京大学史料編纂所所蔵「上賀茂社競馬方算用状」、『上賀茂社司日記』(永禄八・九年)、國學院大學図書館所蔵「神主竹内明久日記」(十五世紀後半・十六世紀前半)などである。なお、『神主竹内明久日記』は、『國學院大學校史・学術資産研究』一一二号(二〇二〇年)に解題・翻刻(遠藤珠紀「國學院大學図書館所蔵「神主

竹内明久日記」(座田文書)の解題と翻刻)がある。

【第三章】社殿と遷宮

本殿内に納められていた御帳台、獅子・狛犬及び、調度品(御箸・御箸台、御盃・御台、御角盥ほか)、賀茂神主経久記のうち『嘉元三年御遷宮日記』(いずれも賀茂別雷神社所蔵)等を展示し、賀茂別雷神社の本殿・権殿や、遷宮の様子を示した。

【第四章】賀茂祭

『嘉元年中行事』(賀茂神主経久記のうち)、真多呂人形(真多呂人形学院制作、現代)、『賀茂祭図』、外陣神饌(模型)(いずれも賀茂別雷神社所蔵)、『葵祭図屏風』(國學院大學博物館所蔵)を展示し、葵祭の様子を示した。

関連行事

本企画展の関連行事として、研究会「賀茂別雷神社研究の現在」、講演会「神饌からひもとく食文化の源流」をオンラインで行った。それぞれの概要は次の通りである。

【研究会】「賀茂別雷神社研究の現在」

会場：國學院大學渋谷キャンパス・賀茂別雷神社  
日時：二月十二日(土) 十三時～十七時三十分

発表者：藤田恒春(賀茂別雷神社史料編纂委員会委員)、山本宗尚(賀茂県主同族会評議員)、辰田芳

雄(就実大学非常勤講師)、加瀬直弥(國學院大學神道文化学部教授)、遠藤珠紀(東京大学史料編纂所准教授、本機構共同研究員)、遠藤基郎(東京大学史料編纂所教授)

司会：金子拓(東京大学史料編纂所准教授、本機構共同研究員)

【講演会】「神饌からひもとく食文化の源流」

会場：賀茂別雷神社  
日時：三月五日(土) 十四時～十五時三十分  
講師：熊倉功夫(一般財団法人葵プロジェクト代表理事)

オンラインミュージアム

「特別展「都の神やしるとまつり」—世界遺産 賀茂別雷神社の至宝—」田中宮司が特別解説!!」を令和四年二月十九日より公開している。本動画では、賀茂別雷神社 田中安比呂宮司に、本展を解説していただいた。(文責：大東敬明)



## 國學院大学博物館

### 企画展「沖繩復帰五〇年

### うちなーぬゆがわりや

### 琉球・沖繩学と國學院

#### 展示趣旨

昭和四七(一九七二)年五月一日、米軍の統治下にあった沖繩県の施政権が日本政府に返還された。今年はそのからちよど五〇年目である。また、今年からさらに遡ること一五〇年前の明治五(一八七二)年明治新政府は琉球国を廃して琉球藩を設置し、沖繩県の設置に至る一連の琉球処分を開始した。

この二つの出来事の節目に当たって、本学博物館では沖繩の歴史と文化、さらには「琉球・沖繩学」と呼ばれる当該地域研究と國學院大學の関わりについて、再確認を試みる。

#### 主催・後援

本企画展は本学博物館が主催し、琉球大学附属図書館の後援を受けた。また、会期中に本企画展に因んで、「沖繩復帰五〇年 歴史・文化・沖繩学」をテーマとする本学研究開



発推進機構による「第四七回日本文化を知る講座」を併せて開催する。

#### 会期

本企画展は新型コロナウイルス感染症対策を講じた上で、令和四(二〇二二)年五月一九日(木)〜七月二三日(土)にわたって、水曜日から土曜日までの十二時から一七時まで公開する。

#### 展示構成

##### 【第一章】琉球・沖繩の歴史と文化

日本の九州島から中華民国台湾島までの間、約一、二〇〇kmの海洋中に点在する島々を琉球列島と呼ぶ。琉球列島に尖閣列島と大東諸島を加えた島嶼群を日本では南西諸島とする。南西諸島の島々の多くは亜熱帯気候帯に属し、日本本土とは異なる歴史と文化を育んできた。本章では琉球大学考古学研究室から借用した考古資料を中心に展示し、先史時代から琉球国の繁栄を経て、島津氏の侵入を受ける一六世紀初頭までの当該地域の歴史と文化を概観する。

【第二章】島津氏の琉球侵攻と明治政府による琉球処分

一六〇九年徳川幕府の認可を受けた島津氏の侵攻を受け、琉球国は降伏した。以後は中国明・清朝の冊封を受けた朝貢国である一方で、島津氏を通じて日本の幕藩体制に組み込まれた。新井白石『南島志』など当

時の資料を展示し、鎖国下にあった当時の日本の人々の琉球国に対する関心の有り様を確認する。

また、江戸幕府を倒した明治政府は日本全国で廃藩置県を推し進めるが、琉球国については明治五年に琉球藩とし、まず琉球国の外交権を剥奪した。その後、明治一二年に至って沖繩県を設置し、琉球の内国化を図った。この琉球処分の経過について、本学図書館蔵の井上毅資料(梧陰文庫)によって明らかにする。

##### 【第三章】琉球・沖繩学の展開

琉球国及び沖繩県の歴史や文化についての研究分野を「琉球・沖繩学」と呼ぶ。國學院大學は琉球・沖繩学の創設と展開に深く関わっている。皇典講究所卒業生で沖繩中学の国語教師として赴任した田島利三郎は、学生であった伊波普猷らに琉球・沖繩の歴史や文化の重要性を教え、研究へと導いた。田島が自ら調査し、書き写した琉球関係資料の全てを託された伊波は後に「琉球・沖繩学の父」と称される。本企画展では田島から伊波へ引き継がれた資料を琉球大学附属図書館から借用、展示する。

また、伊波をはじめとする沖繩出身者は、國學院大學関係者との交流を持ち、柳田や折口が沖繩に関心を向けるきっかけを作った。本学折口博士記念古代学研究所の折口資料を展示し、琉球・沖繩学の展開に果たした柳田・折口の業績を確認する。

##### 【第四章】沖繩戦と米軍支配

昭和一八年一〇月、学徒出陣が行なわれ、國學院大學からも六〇〇余名が戦地に赴いた。折口信夫は教え

子達の壮行のために長歌「学問の道」を詠んでいる。

昭和一九年三月には第三二軍沖繩守備隊が編制され、翌年三月末から連合国軍との激しい地上戦となった。この戦闘で亡くなった國學院大學出身者も多い。その一人として江藤千萬樹を紹介する。

昭和二〇年七月に連合国軍は沖繩戦終結を宣言し、以後、南西諸島の大半は昭和四七年五月まで米軍の支配下に置かれた。この間の南西諸島では沖繩統治に有用な人材の育成を念頭においた米軍によって琉球大學が設置されたが、日本本土の大學への進学を希望する学生は国費・私費留学制度を利用して本土に渡った。國學院大學でも多くの沖繩出身学生が学び、卒業後は沖繩の復興を担った。沖繩出身院友の資料やインタビュー映像をもとに米軍支配下の学生の姿を紹介する。

##### 【第五章】琉球・沖繩研究と國學院

本土復帰後の沖繩では國學院大學卒業生がさまざまな分野で活躍している。本企画展では法政大学教授となり、同大学沖繩文化研究所の開創に携わった外間守善をはじめとする院友たちの業績を紹介する。

##### オンラインでの発信・図録の刊行

本企画展では、本学博物館のYouTubeチャンネルを利用したオンラインミュージアムで展示解説をはじめとする発信を行う。また展示図録『企画展沖繩復帰五〇年うちなーぬゆがわりや 琉球・沖繩学と國學院』(全三二頁)を刊行した。(文責・池田榮史)

## 研究開発推進センター 渋谷学と共存学 (平成二十二年度～令和三年度)

本年度から実施する「(SDGs)と建学の精神」研究事業は、研究開発推進センターにおいて推進してきた「渋谷学」「共存学」等の研究成果を再構成して実施する事業である(本紙七頁参照)。今後、同研究事業を実施するにあたり、基盤となる「渋谷学」「共存学」に係るこれまでの研究事業について、以下、その経緯を記述する。

### 研究事業の経緯

本学における「渋谷学」は、平成十四年(二〇〇二)の本学創立百二十周年記念学術関係事業を契機として発足した「渋谷学研究会」の活動を基盤として実施してきた。同研究会は、発足当初、渋谷学講座、研究会等をベースとして進められた。その後、大学の地域連携・地域貢献の要請もあり、研究開発推進機構の「渋谷学」プロジェクトとして位置付けられ、平成二十一年度から準備を行い、翌二十二年度以降、本センターの研究事業として実施されることとなる。

この「渋谷学」プロジェクト(平成二十二年度・二十三年度)は、副都心(渋谷)地域を対象として、学際的にその都市文化の形成過程を検討し、その成果をもって地域貢献を

実現することを目的とした。その際に、渋谷地域における歴史の解明を「縦軸」とし、渋谷の現状の正確な理解と将来への展望を「横軸」と位置づけた経緯がある。すなわち、渋谷の「歴史」のみならず、次第に変化していく渋谷の「現在」を捉え、「未来」をも考えていくことを課題としたのであり、渋谷の特色や、その由来と現状を把握することを視野に入れて実施されたものといえる。

一方、「共存学」は、二十一世紀COEプログラムの後継補助金事業である「グローバルCOE」(ポスト二十一世紀COEプログラム)に申請した事業計画を基に企画立案し、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業「日本発 共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」プロジェクト(以下、「共存学」として承認されたものである。すなわち、「共存学」は、本学の二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」の成果をふまえ、「建学の精神」(主体性を保持した寛容性と謙虚さ)に基づく研究事業として産声をあげたものといえる。端的にいえば同研究事業は、本学の研究成果を基に、学際的に「共存社会(持続可能な社会)の構築」を検討し、そのモ

デルを提示することで、社会貢献を目指したものである。

こうして出発した「渋谷学」及び「共存学」は、ともに全学的に推進すべき学部横断型の学際研究事業と位置付けられ、その後、「渋谷学」「共存学」を統合した「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」として、平成二十四年度～二十九年度に実施された。

この「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」においては、「建学の精神」に基づく「共存社会の構築」「持続可能な社会の構築」を目指し、「渋谷」「地域」「日本」「グローバル化する世界」の四領域を設定し、その成果を社会還元することを目的として、研究事業を実施した。

その後、「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」の成果をもとに、平成三十年度から令和二年度にかけて、「渋谷の都市形成と再開発に関する研究」(渋谷学)を実施するとともに、平成三十年度から令和三年(二〇二二)度にかけて、研究開発推進センター研究事業「伝統文化・神社・地域と共存社会の研究」(共存学)を実施している。なお、「渋谷の都市形成と再開発に関する研究」については、継続事業として、令和三年度事業「渋谷の歴史・民俗・宗教に関する研究」を実施した。

### 研究事業の成果公開

以上、平成二十二年度以降、実施してきた「渋谷学」「共存学」に係る研究事業の経緯を述べたが、その

成果については、叢書・ブックレットやシンポジウム記録、公開研究会記録等を作成し、公開している。

「渋谷学」の主な成果刊行物としては、研究会の成果を論集としてまとめた『渋谷学叢書』(雄山閣)計五冊、シンポジウム等の成果をまとめた『渋谷学ブックレット』計五冊、渋谷に関わる語り手のオーラルヒストリーをまとめた『渋谷聞き語り』計四冊、その他、シンポジウム記録や渋谷学に関する研究エッセイ、渋谷年表等を収録した『ブックレット 渋谷学』計四冊(別冊を含む)、渋谷学関連の論考や公開研究会の成果を掲載する『都市民俗研究』等を刊行している。また、「共存学」の主な成果刊行物としては、研究成果を論集としてまとめた『共存学』(弘文堂)計四冊、『共存学ブックレット』計二冊がある他、『研究開発推進センター研究紀要』に論文、公開研究会記録、シンポジウム記録等を掲載している。

以上の成果刊行物において、従来の「渋谷学」「共存学」の公開研究会・シンポジウムはいずれも可能な限り記録化しており、今後、その精査と課題抽出を行なっていく予定である。そして、これらの成果を基盤として、本年度から実施する「(SDGs)と建学の精神」研究事業を推進するにあたり、新たな研究と成果公開の枠組を構築し、改めて社会貢献・地域連携の方途を模索していくことが目下の課題となる。

(文責・宮本誉士)

# 彙報

## 会議

### ○全体

- 令和三年度第五回運営委員会、令和四年二月十日(木)、若木タワー地下一階会議室○二

- 令和三年度臨時運営委員会、令和四年三月七日(月)、メール審議

- 令和四年度第一回運営委員会、令和四年五月十二日(木)、若木タワー地下一階会議室○二

- 令和三年度第六回企画委員会、令和四年三月九日(水)、AMC棟五階会議室○六

- 令和四年度第一回企画委員会、令和四年四月二十日(水)、AMC棟五階会議室○六

- 令和三年度臨時人事委員会、令和四年三月二日(水)、メール審議

- 令和四年度第一回人事委員会、令和四年五月十一日(水)、AMC棟五階会議室○六

- 令和三年度第四回教員等資格審査委員会、令和四年二月八日(火)、AMC棟五階会議室○六

- 令和四年度第一回教員等資格審査委員会、令和四年五月十一日(水)、AMC棟五階会議室○六

- 日本文化研究所
- 令和三年度第六回所員会議、令和四年三月一日(火)、オンライン会議
- 令和四年度第一回所員会議、令和四年四月十三日(水)、メール審議

- 学術資料センター
- 令和四年度第一回学術資料センター、令和四年五月二十日(金)、AMC棟五階会議室○六

- 研究開発推進センター
- 令和四年度第一回研究開発推進センター会議、令和四年五月二十五日(水)、オンライン会議

- 國學院大學博物館
- 令和四年度第一回國學院大學博物館会議、令和四年五月二十六日(木)、オンライン会議

- 公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

- 日本文化研究所
- 令和三年度国学研究プラットフォームフォーラム公開レクチャー「本居宣長と和辻哲郎 カミ観念と神話解釈をめぐって」、令和四年二月十九日(土) 十五時〜十七時、オンライン開催、講師「板東洋介(筑波大学人文社会学系准教授)

- 研究開発推進センター
- 研究開発推進センター公開講演会「共存・共生の思想とSDGs | 持続可能な地球社会への道すじ」、令和四年三月三十日(水)、オンライン配信、講師「古沢広祐(國學院大學研究開発推進機構客員教授)

- 出張
- 深澤太郎、「館蔵資料の化学分析

- に係る資料回収」のため、令和四年二月十五日(火)、兵庫県尼崎市
- 深澤太郎・渡辺夏海、「奈良県奈良市若草山山頂付近出土舟形石製品

- の関連資料調査」のため、令和四年五月二十五日(水)〜五月二十六日(木)、奈良県奈良市
- 大東敬明・及川聡、「特別展「都の神やしろとまつり」研究集会

- 開催」のため、令和四年二月十一日(金)〜二月十二日(土)、京都市
- 深澤太郎・佐々木理良、「企画展「アイヌプリー」北方に息づく先住民族

- の文化」展示資料返却」のため、令和四年二月二十一日(月)〜二月二十二日(火)、北海道滝川市
- 大東敬明・志水志保、「特別展「都の神やしろとまつり」講演会開催」のため、令和四年三月四日(金)

- 三月五日(土)、京都府京都市
- 大東敬明、「特別展「都の神やしろとまつり」展示資料返却」のため、令和四年三月二十九日(火)〜三月三十日(水)、京都府京都市

- 池田榮史・深澤太郎、「企画展「沖繩復帰五十年 琉球・沖繩」と國學院」集荷」のため、令和四年四月二十一日(木)〜四月二十四日(日)、沖縄県那覇市

- 研究開発推進機構「國學院大學研究開発推進機構紀要」第十四号(令和四年三月三十一日発行)
- 日本文化研究所
- 日本文化研究所「日本文化研究所年報」十四号(令和三年九月三十日発行)

- 日本文化研究所「二〇二〇年度国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」報告書」(令和四年二月二十八日発行)
- 日本文化研究所「歴史で読む国学」(令和四年三月二十日発行)

- 学術資料センター
- 学術資料センター「資料で見る神道史」國學院大學博物館神道展示室ガイドブック」(令和四年三月三十一日発行)

- 校史・学術資産研究センター
- 校史・学術資産研究センター「校史・学術資産研究」第十四号(令和四年三月四日発行)

- 校史・学術資産研究センター「校史」第三十二号(令和四年三月六日発行)
- 研究開発推進センター

- 研究開発推進センター「研究開発推進センター研究紀要」第十六号(令和四年三月十日発行)
- 研究開発推進センター「ブックレット 渋谷学〇三」(令和四年二月二十八日発行)

- 國學院大學博物館
- 國學院大學博物館「國學院大學博物館研究報告」第三十八輯(令和四年二月二十八日発行)

- 全体
- 研究開発推進機構「機構ニュース」通号三十(令和四年二月二十五日発行)

- 刊行物

- 深澤太郎、「館蔵資料の化学分析

- に係る資料回収」のため、令和四年二月十五日(火)、兵庫県尼崎市
- 深澤太郎・渡辺夏海、「奈良県奈良市若草山山頂付近出土舟形石製品

- の関連資料調査」のため、令和四年五月二十五日(水)〜五月二十六日(木)、奈良県奈良市
- 大東敬明・及川聡、「特別展「都の神やしろとまつり」研究集会

- 開催」のため、令和四年二月十一日(金)〜二月十二日(土)、京都市
- 深澤太郎・佐々木理良、「企画展「アイヌプリー」北方に息づく先住民族

## 令和4年度 國學院大學 研究開発推進機構 事業計画及び人事一覧 (事業別)

\* 研究事業代表者

令和4年6月1日現在

機関	研究事業名	専任教員	兼任教員	客員研究員	ポストク研究員	研究補助員	客員教授	共同研究員		
日本文化研究所	宗教文化に関する研究と学術情報発信の体制構築 (R4~5年度)	※星野靖二 吉永博彰 川嶋麗華	飯倉義之 遠藤 潤 黒崎浩行 平藤喜久子 松本久史 シゲタツツエリク		大場あや 高田彩 武井謙悟 藤井修平 宮澤安紀	木村悠之介 長見葉子 鳴海あかり	井上順孝 櫻井義秀 ナカイ・ケイト 林 淳 ヘイヴンス・ノルマン 山中 弘	天田顕徳 井関大介 一戸 渉 今井功一 今井信治 萩原 稔 小田真裕 小平美香	小高絢子 ガイタニティス・ヤニス 齋藤公太 芹口真結子 塚田穂高 問芝志保 丹羽宣子 野口生也	原田雄斗 ビュテル・ジャン=ミシェル フレール・カール 牧野元紀 三ツ松誠 村上 晶 矢崎早枝子
学術資料センター	学術資料センター(考古学資料館部門)事業	池田榮史 深澤太郎	青木 敬 ※内川隆志 小川直之 黒崎浩行 笹生 衛 谷口康浩 吉田敏弘 大日方一郎	阿部常樹 鳥越多工摩		岩瀬春奈 大山晋吾 松本耕作		荒井裕介 石井 匠 石川岳彦 伊藤大祐 植田 真 奥山 香 尾上周平 加藤元康	菊地大樹 北澤宏明 楠惠美子 栗木 崇 黒田迪子 惟村忠志 齋藤しおり 大工原豊	田口哲也 野藤 妙 平本謙一郎 山口 晃
	学術資料センター(神道資料館部門)事業	大東敬明 吉永博彰 木村大樹	加瀬直弥 ※笹生 衛 鈴木聡子			高橋あかね	岡田莊司	水谷 類		
校史・学術資産研究センター	校史・学術資産研究センター事業	大東敬明 渡邊 卓 比企貴之	加瀬直弥 ※齊藤智朗 笹生 衛 野中哲照 藤田大誠 矢部健太郎 手塚雄太	高橋俊之 高見澤美紀	大番彩香 齊藤みのり		根岸茂夫	遠藤珠紀 金子 拓		
研究開発推進センター	研究開発推進センター研究事業「神道・日本文化の先端的研究」	宮本誉士 大東敬明 木村大樹 半田竜介	太田直之 加瀬直弥 藤田大誠 ※松本久史		大貫大樹			河村忠伸 黒岩昭彦 小林威朗 坂井久能 佐藤一伯 大丸真美	高原光啓 武田幸也 津田 勉 東郷茂彦 戸浪裕之 中野裕三	野田安平 宮澤佳廣 森 悟朗 吉田扶希子
	「〈SDGs〉と建学の精神」研究事業 (R4~8年度)	星野靖二 宮本誉士	菅 浩二 藤本頼生 ※松本久史 手塚雄太	秋野淳一	伊藤新之輔	高橋亮一	上山和雄 古沢広祐	今泉宣子 康 成文 高久 舞 西俣先子	冬月 律 吉田律人 吉野 裕	
	國學院大學「古典文化学」の創出研究事業 (R4~8年度)	渡邊 卓 半田竜介	上野 誠 大石泰夫 ※谷口雅博 土佐秀里 西岡和彦 松本久史 荒木優也	鶴橋辰成 小野諒巳 キロス・イグナシオ	中山陽介 古畑侑亮		鈴木健多郎	辰巳正明	大谷 歩 倉住 薫 神宮咲希 鈴木道代 曹 咏梅	
國學院大學博物館	國學院大學博物館事業	池田榮史 大東敬明 深澤太郎 渡邊 卓 吉永博彰	内川隆志 ※笹生 衛	田中 潤			金子皓彦 小林達雄 朱 岩石 椛山林繼 福尾正彦 古谷 毅 三橋 健 茂木雅博 柳田康雄	粕谷 崇 中村 大 中村耕作 パウシュ・イローナ 安高啓明 山本哲也		

## 令和4年度 國學院大學 研究開発推進機構 人事一覽

機構長	笹生 衛						
日本文化研究所長	平藤喜久子						
学術資料センター長	内川隆志						
校史・学術資産研究センター長	齊藤智朗						
研究開発推進センター長	松本久史						
國學院大學博物館長	笹生 衛						
國學院大學博物館副館長	内川隆志 及川 聡						
専任教員	教授	池田榮史	星野靖二	宮本蒼士			
	准教授	大東敬明	深澤太郎	渡邊 卓			
	助教	吉永博彰					
	助教(特別専任)	川嶋麗華	木村大樹	半田竜介	比企貴之		
兼任教員	教授	青木 敬	飯倉義之	上野 誠	内川隆志	遠藤 潤	大石泰夫
		太田直之	小川直之	加瀬直弥	黒崎浩行	齊藤智朗	笹生 衛
		菅 浩二	谷口雅博	谷口康浩	土佐秀里	西岡和彦	野中哲照
		平藤喜久子	藤田大誠	藤本頼生	松本久史	矢部健太郎	吉田敏弘
	准教授	手塚雄太					
助教	荒木優也	シッケタンツ・エリック			鈴木聡子		
助手	大日方一郎						
研究員	客員研究員	秋野淳一	阿部常樹	鶉橋辰成	小野諒巳	キロス・イグナシオ	高橋俊之
	ポスドク研究員	高見澤美紀	田中 潤	鳥越多工摩			
		伊藤新之輔	大貫大樹	大場あや	大番彩香	齊藤みのり	高田 彩
研究補助員	武井謙悟	中山陽介	藤井修平	古畑侑亮	宮澤安紀		
	岩瀬春奈	大山晋吾	木村悠之介	鈴木健多郎	高橋あかね	高橋亮一	
客員教授	長見菜子	鳴海あかり	松本耕作				
	井上順孝	上山和雄	岡田莊司	金子皓彦	小林達雄	櫻井義秀	
	朱 岩石	楢山林繼	辰巳正明	ナカイ・ケイト	根岸茂夫	林 淳	
	福尾正彦	古沢広祐	古谷 毅	ヘイヴンス・ノルマン			
共同研究員	茂木雅博	柳田康雄	山中 弘				
	天田顕徳	荒井裕介	石井 匠	石川岳彦	井関大介	一戸 渉	
	伊藤大祐	今井功一	今泉宣子	今井信治	植田 真	遠藤珠紀	
	大谷 歩	萩原 稔	奥山 香	小田真裕	小平美香	小高絢子	
	尾上周平	ガイタニティス・ヤニス	粕谷 崇	加藤元康	金子 拓	河村忠伸	
	菊地大樹	北澤宏明	楠恵美子	倉住 薫	栗木 崇	黒岩昭彦	
	黒田迪子	康 成文	小林威朗	惟村忠志	齋藤しおり	齋藤公太	
	坂井久能	佐藤一伯	神宮咲希	鈴木道代	芹口真結子	曹 咏梅	
	大工原豊	大丸真美	高原光啓	高久 舞	田口哲也	武田幸也	
	塚田穂高	津田 勉	間芝志保	東郷茂彦	戸浪裕之	中野裕三	
	中村 大	中村耕作	西俣先子	丹羽宣子	野口生也	野田安平	
	野藤 妙	パウシユ・イローナ	原田雄斗	ビュテル・ジャン＝ミシェル		平本謙一郎	
	冬月 律	フレーレ・カール	牧野元紀	水谷 類	三ツ松誠	宮澤佳廣	
	村上 晶	森 悟朗	矢崎早枝子	安高啓明	山口 晃	山本哲也	
	吉田扶希子	吉田律人	吉野 裕				

## 令和4年度 事務局人事

学術メディアセンター事務部長	及川 聡			
学術メディアセンター事務局研究開発推進機構・図書館担当部長	山口輝幸			
学術メディアセンター事務局情報システム担当部長	堀内弘行			
学術メディアセンター事務局情報システム担当次長	後藤幸雄			
学術メディアセンター事務局情報システム課長	川畑敏之			
学術メディアセンター事務局図書館担当次長	澤井 隆			
学術メディアセンター事務局研究開発推進機構事務課長	飯塚陽子			
学術メディアセンター事務局研究開発推進機構事務課	小平浩衣	佐野真之	相川由起	宮本千夏子 三塚広椰
國學院大學博物館担当	志水志保	三島隆		
國學院大學博物館学芸員	佐々木理良	尾上周平	網谷哲成(兼務)	

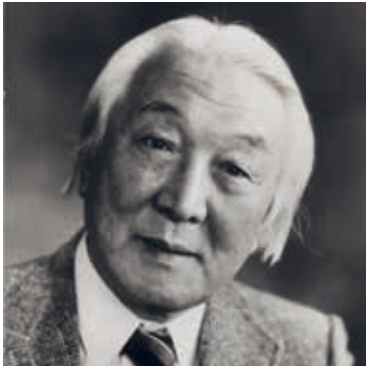
### 資料紹介 西田長男博士旧蔵資料

#### 受贈の経緯

令和三年十一月、本学で教鞭をとられた神道史学者・西田長男博士(一九〇九〜一九八一)のご親族より、博士が集められた資料を「寄贈いただいた」。

令和元年五月に岡田莊司本学名誉教授とともに資料を拝見して以降、学術資料センター(神道資料館部門)において、同資料の確認・整理を継続し、昨年度、受贈のための点検(約三五〇〇点)を終了した。点検には、主に塩川哲朗・木村大樹両氏(いずれも、当時、本機構ポスドク研究員)があたった。

これまでの研究成果としては、木村大樹「資料紹介(西田長男旧蔵) 三条西実隆筆『延喜式』(抄)の翻刻・紹介」(『國學院大學 研究開発推進機構紀要』一四、二〇二二年) ほかがある。



西田長男

#### 西田長男について

西田長男(以下、敬称を略す)は、三重県に生まれ、昭和四年(一九二九)に國學院大學神道部、同七年に同道義学科を卒業した。道義学科に在学している頃より、神道史学者の宮地直一(一八八六〜一九四九)の教えを受けた。昭和十一年に専攻科に入学。

同十七年に本学講師、同十九年に東京帝国大学文学部講師となった。戦後、一時、國學院大學から離れるが、同二十九年、再び本学講師、同三十二年に教授となった。昭和三十年には「日本宗教の発生に関する一試論」により、國學院大學より文学博士の学位を授与された。

昭和五十四年、本学を定年退職。晩年は神道大系の編纂にも尽力した。

#### 著作

主要な業績は、晩年に刊行した『日本神道史研究』全十巻(講談社、一九七八年)にまとめられている。このほか、著書として、『神道史の研究』(雄山閣、一九四三年)、『同第二』(理想社、一九五七年)、『神社の歴史的研究』(塙書房、一九五六年)などがある。

昭和十一年頃から吉田神道の研究を始め、吉田家の家老的な役割を務めた鈴鹿家の文庫、また吉田家の文

庫の調査を行った。昭和十五年に宮地直一監修、吉田神社編『吉田叢書 第一編 神道大意』(内外書籍)で解題・校訂を担当して以降、『同 第四編 中臣祓・中臣祓抄』(西田長男解題・校訂、叢文社、一九七七年)まで同叢書の編纂を行った。

その生涯や論文・著作の一覧は、『神道及び神道史 西田長男博士追悼論文集』(國學院大學神道史学会編、名著普及会、一九八七年)にまとめられている。

#### 業績と旧蔵資料

西田長男は、論文の中で、自身が所蔵する資料を用いることも多かった。これまでの点検の中で、西田が論文で用いた資料が見出された。管見に触れた主なものは次のとおりである。

「両部神道家の日本書紀研究」(『國學院雑誌』四十四巻四号、一九三八年)で用いた「四重秘

積 第二」。『日本神道史研究 第四巻(中世編上)』に収められた「室生竜穴神社及び室生寺の草創―東寺観智院本『一山年分度者奏状』の紹介によせて―」で用いた『一山年分度者奏状』(室生山寺旧記)。「神道史の研究 第二」に収められた「中臣寿詞攷―新発見の遺文を中心に―」で紹介した「中臣寿詞」(荒木田守農筆)、同「伊勢本古事記伝来に関する一、二の資料―「道果本古事記解説補遺」―」で用いた「諸大



『諸大事』

事』や『伝法灌頂』(道果筆)。「諸大事」は同書所収「在伊勢古鈔本と在尾張古鈔本との関係に就て」でも触れられている。

このほか、吉田家旧蔵『釈日本紀 神代要略抄』(吉田兼右筆)を確認している。

今後は、國學院大學博物館での展示や公開に向け、目録の作成、調査・研究などを進め、あわせて西田長男の学問についての研究も深めたい。(文責・大東敬明)